て、私が助教授になった頃修身を担当していた菅原教造は極めてデカダンの教育者で、笑い絵のようなものを沢山カバンに入れて持っており、修身の授業でセックスの話なども堂々と喋るといった風だった。白浜先生が心配して私に「君、行って聴いて来い」と言うので、生徒の後ろの方で聴いていたものだった。その後、和田英作が校長となった。倫理道徳を教えるのは校長などが一番良いのだが、和田という人は非常に潔癖な人で、自分はそんな人格者ではないからと、高島米峰に依頼した。高島の講義は社会学的倫理とでも言うべきもので、身近な実例を挙げながら極めて平易に説いた。

学科は他に英語、美学、色彩学などがあり、教授練習の授業は、皆で時々余所の学校へ行き、その中の代表者が教授の練習をやるのだった。体操は主に赤間運蔵の担当で、この人は生徒の名を覚えることにかけては天才的だった。

実技のうち、絵画は日本画と西洋画を一週間交代でやり、三年になってからどちらかを選択することになっていた。西洋画は田辺至の指導で、殆どデッサンばかりやり、油絵は少ししか描かず、水彩はやらなかった。日本画は一年では主に動植物写生、二年では人物写生（日本画式デッサン）で、模写は狩野派や白描のものを少しやった。文庫には荒木寛畝や川端玉章のつけたて没骨の絵が沢山あって、私は暇があるとそれを模写したから、絵が達者になった。彫刻は手工の一部としてやった。水谷鉄也の指導で、一年では石膏デッサン、二年以降はモデルを使って制作した。

書道は一年から三年まであったが、これをやると学校に赴任して書道も受持つことになり、負担が増えるのが嫌で、なるべくやらない連中が多かった。担当は岡田起作で、手本を書いてくれた。だが、非常にやかましい先生だったので、生徒は逃げてしまう。二十人試験を受けて免状を貰ったのは五、六人だった。この先生が老いて、その後比田井天来、小琴（仮名専門）夫妻が教え、天来の歿後は尾上柴舟、石橋犀水が教えに来た。

私共の卒業のときは論文と作品を提出したが、論文などは誰も見ない。作品に関する考え方は本科と同じで、特に教育者のための絵を習うわけではない。しかも本科五年と師範科三年では卒業制作の段階で当然差が出るから、皆本科に負けないようにと一生懸命やったものである。ただし、白浜先生は師範科は飽くまで教師になるための科であるから、絵描きになりたいなら本科へ行けと言い、何もかも教師向きにやった。仲間にピカソやマチスの真似をした者があったが、先生はそんなことをしてはいかんと言われた。

師範科教師として母校に戻ったときは実に忙しかった。手工、用器画法、日本画、西洋画の授業の外に理事としての事務的な仕事や卒業生たちの世話もしなければならず、しかも月給は七十五円だった。師範科在学、在職を通して見て、その教育内容自体には余り大きな変化は無かったように思われる。絵画の内容が多少変化したこと、解剖学授業が削除されたこと、戦争激化とともに軍事教練が盛んになったこと、澤田源一校長時代〔昭和十九年〕に教員全員が辞表を出したことなどを除けば、目立った変化というものは無かった。

③ 高村光雲喜寿祝宴、木彫科への寄附金

昭和三年四月十六日、名誉教授高村光雲の喜寿を祝う宴が催され

た。同日の『十三松堂日記』に

〔上略〕午後四時より東京會館に開かれたる高村光雲翁喜壽祝宴に赴く　頗る盛會にて來會者四百五十人に達せり　此日高村氏より美術學校木彫科標本費の中へ壹千圓　美術協會玄關修築費の中へ壹千圓　東京府美術館增築費の中へ壹千圓　寄付の申出ありたり

と記されている。この日は正木直彦、彫刻科教官らの外に横山大観、川合玉堂、和田英作、小室翠雲その他美術界の面々が大勢出席し、大宴会となったので、翌日の各紙が写真入りで大きく採り上げた。『東京毎夕新聞』は次のように報じている。

〔上略〕貞丈の講談谷風や、天洋の奇術や結城孫三郎の操人形十種香などの餘興の中に、光雲翁は一族四人と共に山本瑞雲氏に案内されてニコ〳〵として設けの席につく、彼地からも此地からも翁を取卷いて賀辭を述べる、餘興が濟むと愈々祝賀會に移る、司會は内藤伸氏、賀辭は平山成信男と正木直彦氏、その賀辭の中には簡單ながら翁が五十餘年美術界に致した功勞がよく盡くされてゐる、それが終ると平尾賛平氏が恭しく記念品目錄を贈呈する、それは此日參會した人々の自署の帖と、即興の詩歌書畫の帖、それから老の身を安らかにといふ意味の夜具一襲ね、繪畫一幀である、翁のあの福相に一層の嬉しさを湛へつゝ感極つて謝辭を述べた、かうして式は七時十分頃終り食堂も開かれ春の一夜を樂しく語り合ひつゝ九時頃散會した、翁はこの賀宴に感激して觀音像千體を彫刻する一方我美術界のため三千圓を寄付することになつたが、千圓は美術學校の木彫科の研究費に、千圓は日本美術協會の迎賓館建築費に、あとの千圓は東京府美術館の增築費に充てる旨正木美術學校長から發表された　尙大阪の木彫家から光雲翁に立派な記念品が贈られた〔下略〕

④　学生思想問題およびプロレタリア美術運動

昭和初期の本校生の間に現れた顕著な傾向として、一般に学生思想問題と呼ばれる左翼思想活動とそれに関連したプロレタリア美術運動への参加ということがある。

学生思想問題というのは、「大正末から昭和初期にかけて学生層を中心とする左翼的、社会主義的思想および運動を主として官側における治安維持の観点から当時総括した言葉」（『日本近代教育史事典』昭和四十六年、平凡社）である。第一次世界大戦は大正七年に終結したが、いわゆる戦争景気によって日本の大企業が飛躍的発展を遂げた一方で、物価が著しく騰貴して庶民生活の困窮が甚しくなり、全国各地で米騒動が起こるなどし、社会問題が激増した。大正期の後半はいわゆる大正デモクラシーの気運とともに国内体制の矛盾を背景とした社会主義運動が著しく興隆した時代であるが、前の戦争景気は一転して恐慌の到来を招き、経済界の不況が続くなかで庶民の生活不安は深刻なものとなって行った。こうしたなかで大正十二年九月一日には関東大震災が起こり、東京とその近辺は大混乱に陥ったのであった。